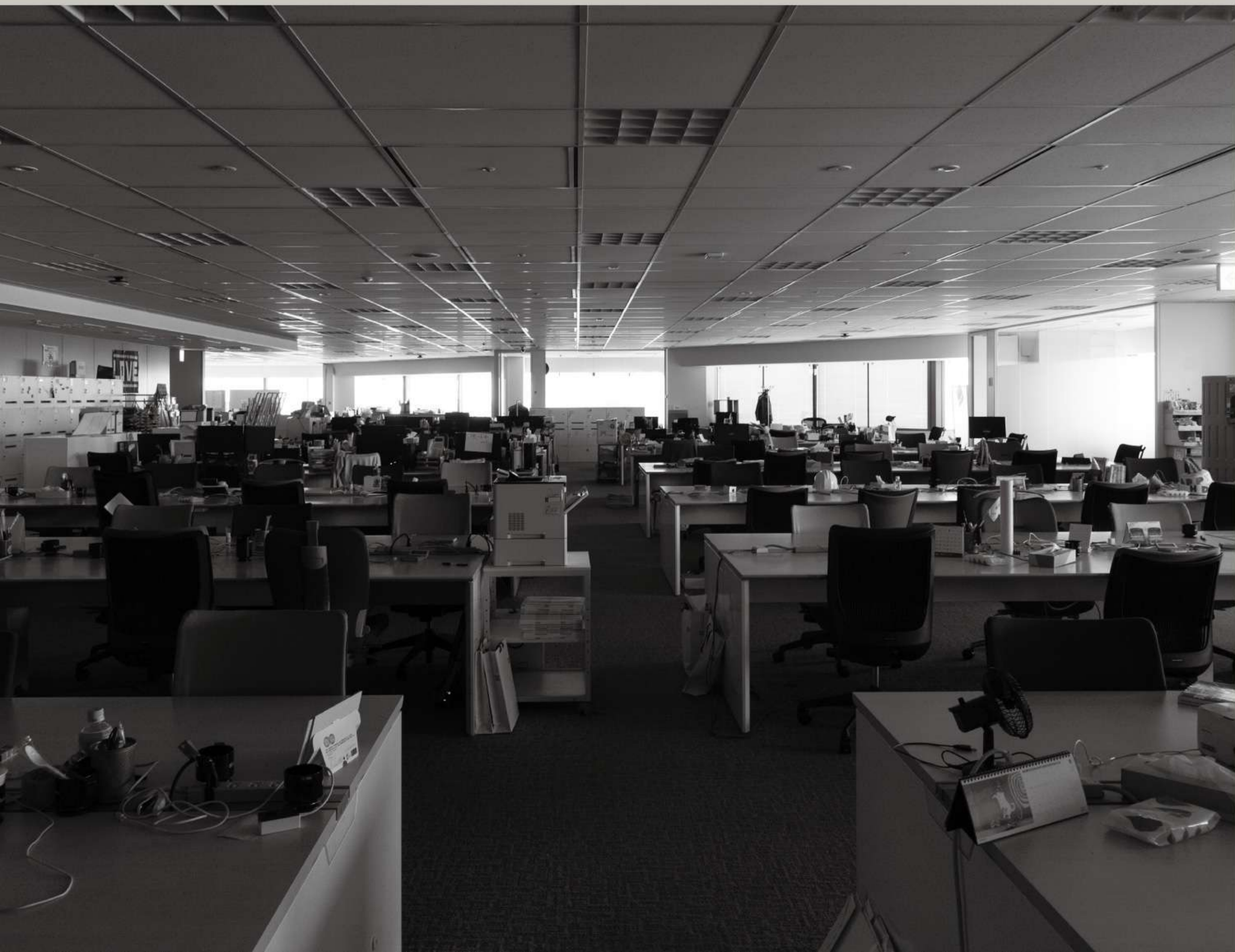


ミルコミ

Macromill Communication

Vol.160

コロナ禍の
“密”な連携



目次



18 あの人のおススメ!
読んで良かった本・漫画

24 **Special Interview** vol.01 国際政治学者 三浦瑠麗さん

30 怒涛の一年を振り返る
七期の思い出川柳

ミルコミ20周年特別号

読者の声をご紹介します



ミルコミは、前回の20周年特別号より社外公開をスタートしました。早速、ご家族やご友人に見せてくださった方もいるようです。本社オフィスのエントランスや決算説明会でも配布しており、オフィス来訪者や求職者の方、投資家、卒業生の皆さまにもご覧いただいています。
発行後には、毎回読者アンケートを行っており、前号の評価は「とても面白かった」「やや面白かった」の合計が92%でした。寄せていただいた感想を一部ご紹介します。

Q.面白かった・良かった記事を3つまでお選びください。

1位 20年を振り返る

マクロミルの歴史や当時のエピソードを知ることで、20年間築いてきた先輩方への感謝と会社への親近感がより湧きました。またこれからのマクロミルの歴史を作っていくという気持ちになりました。

社歴の浅い社員にとっては歴史の共有として、ベテラン社員にとっては初心に戻る事ができる機会だったと思います。



2位 20周年お祝いメッセージ

クライアントからお祝いの言葉をいただける会社であり続けなければいけない、と改めて思いました。

創業者の杉本さんのメッセージが印象に残りました。入社したばかりなので創業者の想いを聞けて良かったです。

20年間も参加いただいているモニターさんがいることに驚きました。もちろんこれまでの企業努力にも。



3位 データで見るマクロミル2020

入社時と比べながら楽しく読ませていただきました。



社外の方からも感想をいただきました

マクロミルをよく知りませんでしたが、とても明るく前向きな会社だと感じました。会社が設立されてからの歴史などを知ることができ、常に向上心を持ち続けていてこれからも応援したいと思えました。(社員のご家族の方)

佐々木さんのお言葉より今後も良い齢を重ねていきたいとのこと、ご自身も含め会社のことと思いますが、20代の子を持つ母として、若手社員の齢も良いように重ねさせていただけると感じました。(社員のご家族の方)

マクロミルの過去と未来に着目した今回のミルコミを見て、先輩方が築いてくれたマクロミルをもっともっと大きくして、お客様の悩みを解決できる社員になりたいと思える1冊でした。(20年度内定者)

← JR 品川イーストビル
JR Shinagawa East Building

↑ JR 品川駅
JR東日本 Shinagawa Station

↑ びゅうプラザ
びゅうプラザ
Ticketing and Travel Service Center
東海道・山陽新幹線
Tokaido・Sanyo Shinkansen

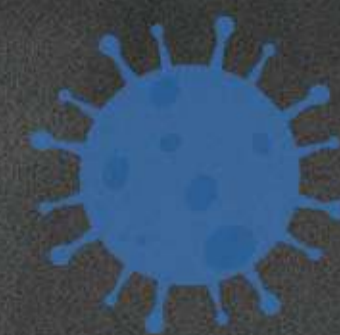
アトレ品川
atre Shinagawa



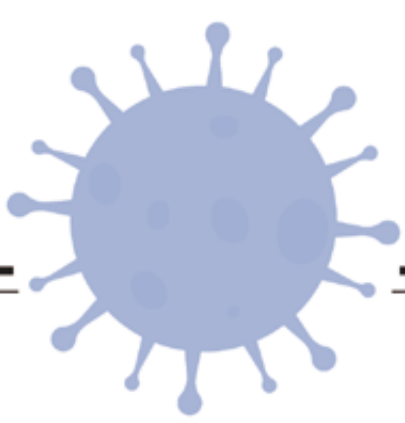
特集

コロナ禍の “密”な連携

関西支店	6
CD本部 × BCP	7
人事企画U	8
RD部	9
RD部 × リサーチ営業本部	12
オフラインリサーチ部	13
PQMG・エムキューブ・バックオフィス	14
社内インフラU	17



世界中で猛威を振るう新型コロナウイルス。マクロミルも大きな影響を受け、たった3カ月ほどで仕事の進め方や働き方などは激変した。刻一刻と世の中の状況が変わる中、マクロミル社内ではどのような議論がなされ、こういった決断や連携がされてきたのか。各本部キーパーソンへの取材とともに振り返る。



関西支店

突然の2週間出社禁止

3月。マクロミルにとつての最繁忙期を迎える中、新型コロナウイルスとの闘いは突如始まった。

「ビルで感染者が発生しました」

3月4日、関西支店の入居する梅田ダイビル管理会社から、ウエスト営業部部長の熊野真介さんに一報が届いたのは夜22時を過ぎてのこと。急な連絡に動揺しながら、すぐに防災・BCPプロジェクトに報告し、判断を仰ぐ。関西支店の全社員へ一斉に安否確認メールが届いたのは23時半過ぎのことだった。

「明日のビル入館は禁止です。自宅リモートワークを行ってください。リモートワークができない人は自宅待機としてください」

そのメールを見た社員から、熊野さんへひっきりなしに相談が寄せられた。「明日のアポはどうすればいいですか」「PCを持って帰っていかないのですが、明日は仕事できないということでしょうか」

「電源がなく、午前で充電が切れてしまいそうです...」

ちょうど東京出張中だった熊野さんは宿泊先のホテルで深夜まで必死



国内拠点において、他社の感染者が最初に発生した梅田ダイビル

に対応を続け、早朝も関係各所への連絡に追われた。

「これは大変なことが起こった、とパニック状態でした。最初に感染が判明したのは清掃員の方でしたが、その人がマクロミルのフロアを清掃していたかもしれないし、ひよっとするとメンバーが接触していた可能性もある。とにかく皆に検温をお願いしながら、私は対応すべきことを続けました」(熊野さん)

翌日早々、全社員や全クライアントにお知らせメールを送付。お客様から「案件は大丈夫でしょうか」とご心配のご連絡をいただきつつ、「真摯に教えていただきありがとうございます」

「大変な状況だと思いますが頑張ってください」というメールも複数届いた。

社内からは沢山のサポートが寄せられた。2週間もオフィスに入れない関西支店の社員のために、社内インフラの皆さんがPCや電源など必要な備品を、たった2営業日で各社員の自宅に全部郵送してくれた。品川の営業アシスタントさんたちも「何か手伝えることはありませんか」と気遣って連絡をくれ、支えてくれたという。それから、オフラインリサーチ部部長の久島哲志さんと相談しながらインタビューの調整も進めた。オフィスで実施予定だったインタビューは、なんと前日に他会場を探して変更。また、

CDD本部×BCP
新型感染症緊急対策プロジェクトの発足

関西支店の一件からも分かるように、マクロミルは新型コロナウイルス対策への着手が遅かった。経営会議では2月末から検討され始めていたものの、新型感染症緊急対策プロジェクトが正式に発足したのは3月下旬のことだった。

「今後、他のビルやマクロミル社内からも感染者が発生する可能性は大きい。会社として、事業方針に沿った判断と準備が必要だと考えた」(執行役員篠田徹也さん)

そこでコミュニケーションデザイン本部(以下、CD本部)を管掌する篠田さんと、同本部の有吉希さんが中心となり、防災・BCPプロジェクトとも連携しながら、次から次へと押し寄せてくる様々な課題にスピード感を持って取り組み続けた。

防災・BCPプロジェクトは、1年半前に人事部や法務総務部を中心に発足した。地震や火災、津波を想定した防災計画や事業継続計画の策定に関わってきたが、今回のコロナ禍では社員からの問い合わせや全社アナウンスなどに尽力。全国の入居ビルから相

次いで感染者が確認される中、社員が混乱しないよう正確でタイムリーな情報発信を継続してくれた。

「振り返れば4月はマクロミルが入居するビルで複数回にわたって他社で感染者が確認され、あまりの連続ぶりにこちらまで混乱しそうになった。本場にチャレンジングだったが、チームのメンバーがとても心強くしばしば助けられたと思う。とにかく関係各所との連携が命だった」(人事部部長笹平亜由子さん)

新型感染症緊急対策プロジェクトと防災・BCPプロジェクトが、社員の安全と事業継続とのバランスを取りながら経営陣と様々な合意形成を進めていったことで、マクロミルの新型コロナウイルス対策は一気に前進した。

3月の社会・マクロミルを取り巻く主な出来事

- 3月4日 関西支店の入居する梅田ダイビルの他社で感染者発生
- 5日 関西支店への出張・入館を禁止
- 11日 WHOが世界の流行状況をパンデミックと認定
- 13日 スコットさんから各拠点の現状を共有
- 19日 関西支店への出張・入館を再開
- 24日 新型感染症緊急対策プロジェクトの発足
- 25日 外務省が全ての国への渡航自粛を要請
小池都知事が週末の不要不急な外出自粛を要請
- 29日 東京での感染者が2日連続60人を超す
- 30日 小池都知事が夜間の外出自粛を要請
- 31日 入社中止、新卒研修のオンライン実施が決定

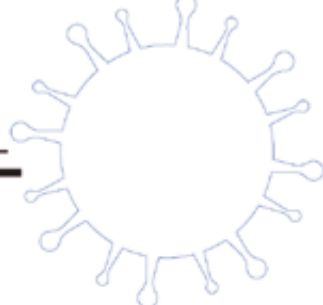


感染の可能性があったためお客様との対面接触を禁止していた関西支店の社員の代わりに、急遽東京から運用スタッフに来てもらったりした。

翌週には、代表執行役副社長 日本代表の佐々木徹さんと、執行役副社長 グローバルCHRO(当時)の岡慎一郎さんから、関西支店の全社員にオンライン会議でメッセージが発信された。その場では「急な自宅でのリモートワークになり不安なことはないか」といった呼び掛けや、ビル内の感染状況の詳細について共有がなされた。

「正直な話、清掃員だけでなく、テナントからも複数名の感染者が確認されていたため、『メンバーにどこまで伝えようか。全てを伝えると、もしかしたら自分も感染しているかもしれないと余計不安にさせてしまうのでは』と心配になり、執行役とは事前に相談した。でも『マクロミルはBe True, Be Openを大事にしている。こういう時こそ皆には包み隠さず話そう』と決め、全てを話しました」(熊野さん)

幸いなことに関西支店から感染者は発生せず、拠点を越えたチームワークで突然の出社禁止という初めての事態をどうにか乗り越えた。



人事企画U

入社日前日に決断
全編オンラインでの
新卒研修

国内での感染者数増加が止まらない3月の最終日。明日4月1日に新卒59名が入社を控える中、人事企画Uの皆さんは「本当に、このまま例年通りの集合研修をやっているのだろうか」と頭を悩ませていた。

入社前日の朝11時。U長の森澤隆行さん、田澤美智子さん、大角桃子さんの三人とも不安が拭えず、「とりあえず話そうか」と、急遽ミーティングルームに集まった。

「三密の中で新卒研修をやるのは、やっぱりリスクが高すぎる。どうにかしてオンライン研修のやり方を考えてみよう」

数時間かけて実施方法を検討し、岡さんと笹平さんからオンライン研修実施の許可をもらえた頃にはもう17時を過ぎていた。研修の形式変更について新卒たちにも急いで連絡した。

「Teamsを使えばどうにか研修できそうだな」と分かったのはもう夜になってから。あまりに怒涛すぎて、3月31日の記憶はほとんどない（大角さん）

4月1日は、密にならないよう新卒を4グループに分け、時間をずらして出社してもらった。

「私たちもオンライン研修は手探りだけど、ぜひ一緒に作ってほしい」と森澤さんが新卒に呼びかけ、その日はノートPCを手渡しして解散。4月3日から3週間の研修がスタートした。初日は、まず全員のTeams接続を確認。一人ずつ自己紹介を行った。

その裏では、各部門の研修担当者がオンライン開催に向け、コンテンツを急遽変更するなど準備を進めてくれたという。リサーチソリューション本部の皆さんは、リリースされたばかりのオンライン定



4月1日の研修は密にならないよう空間を空けて実施

性調査ツールを取り入れ、新卒が楽しく研修に参加できるよう配慮してくれた。

またエクセル研修を担当したデータマネジメント部の皆さんは、どのような研修プログラムが良いかを考え、人事企画Uへ事前に提案してくれた。そして研修当日は業務の合間を縫って、9名が研修に協力。新卒をチームに分けて細やかにフォローしてくれたり、研修後もチャットで質問に答えてくれたりしたという。

「研修後も質問に答えてもらえるなんて、これまでの集合研修では手軽にできなかったこと。研修担当の皆さんに助けられたし嬉しかった」（田澤さん）
研修が進むうちに、他にもオンライン



Teamsで新卒の皆さんに呼び掛ける大角さん

ならではの良さに気づき始めた。

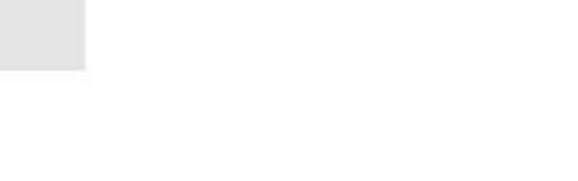
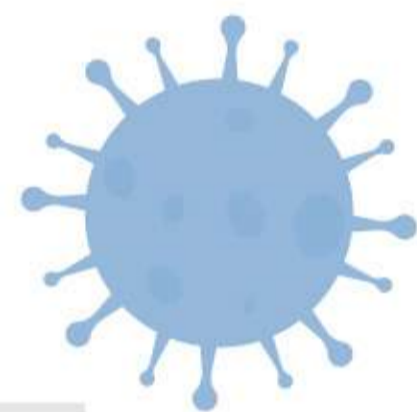
「オンラインだからこそできる盛り上がりがある。例えばチャットやいいねマークとか。実はオンライン研修の方が、集合研修よりも新卒の感情を拾えるんじゃないか」（森澤さん）

もちろん対面研修ができないことの弊害はあり、名刺交換や電話対応の練習など一部の実施は諦めた。それでも可能な限り、集合研修と同じ環境を提供できるように、時には人事部総出で新卒全員と面談も行った。そうだった心遣いに対し、研修最終日には新卒たちから人事企画Uの皆さんにそれぞれ色紙が贈られたという。

「人事の方も慣れない状況の中、研修を行っていただきありがとうございます」

「研修中にもチャットをしてくださったので、寂しさを感じず受講できました」

「生忘れのない新卒研修になりました」
オンラインでどこまで新卒に寄り添い成長を支援できるか、心配に感じたこともあったという人事企画Uの皆さん。想いは、オンラインでもちゃんと伝わっていたことを実感した。新卒の適応力にも助けられながら初のオンライン研修は無事に終了。新卒たちは、予定通り4月末から各部に配属されている。



一秒でも早く
リモート化を！

RD部

新卒研修をオンラインで実施し始めた頃、社内の働き方もまた大きく変わろうとしていた。4月7日。政府の緊急事態宣言発令直前に、佐々木さんから全社メールが送付された。

「明日以降、発令の対象エリアとなる東京と大阪の皆さんは自宅でのリモートワークをお願いします。これまでに自宅でのリモートワークを行ったことがない部門は、準備期間を経て順次移行してください」

自宅でのリモートワークという方針になり、一番影響を受けたのはリサーチディレクション部（以下、RD部）だった。これまでRD部はデスクトップPCで作業し、紙を使った業務フローを構築してきたため、社外での業務を想定できていなかった。品川RDUのメンバーは、ノートPCも携帯も貸与されていないためひとまず自宅待機。メンバーの全案件はマネジャーやリーダーが引き継いで運用したり、一部は仙台RDUへ移管したりした。

その結果、仙台RDUの案件数はほぼ倍増し、瞬間的には繁忙期並みの案件量となった。どうやって運用しきる

うかと頭を抱える仙台RDUのマネジャー陣に対し、部長の田中哲さんが声を掛けた。

「品川のマネジャーで何か手伝えることがあれば何でも言ってほしい」

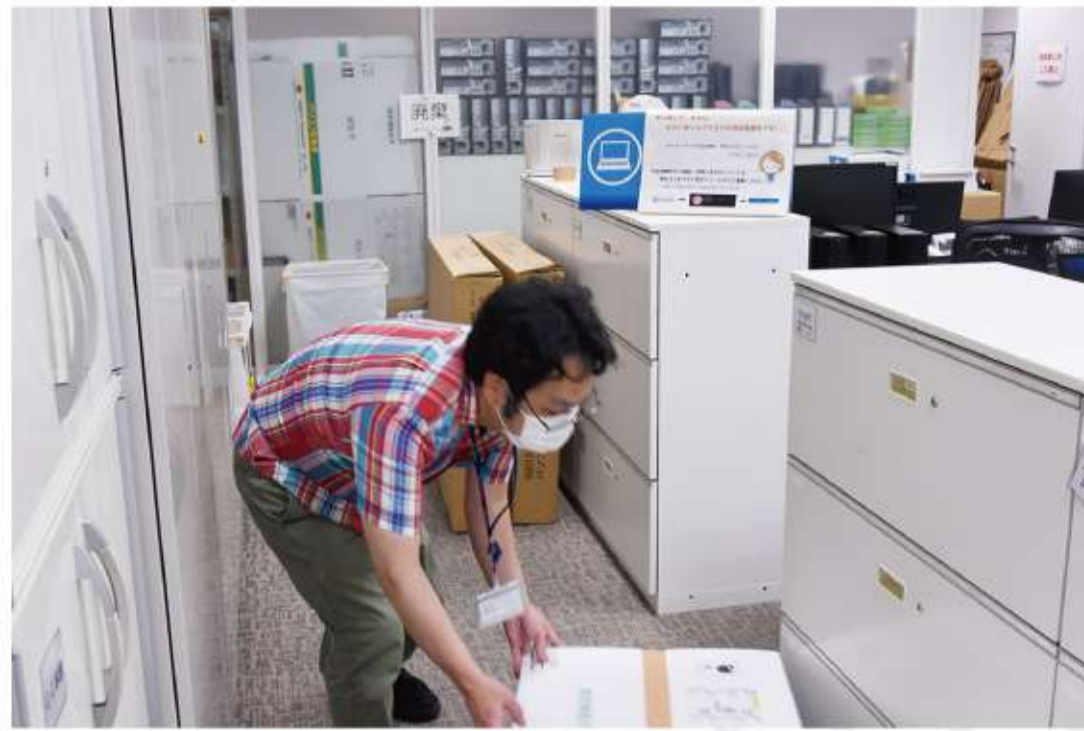
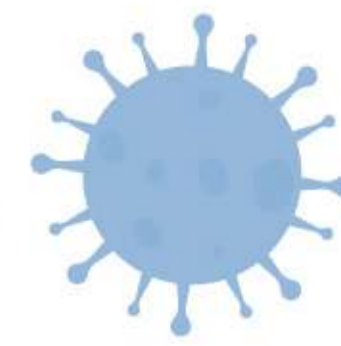
マネジャーはノートPCも携帯も持っている。自宅では紙が使えずスビードは落ちるものの、運用サポートなど何かできることはないかと考えての申し出だった。これに対し、仙台のU長を務める中川匡浩さんはマネジャー陣とも相談の上でこう伝えた。

「仙台でもコロナの感染者が出始めている。仙台のビルだっという感染者が出てもおかしくない。今から間に合うか分からないけれど、とにかくリモートワーク化を一秒でも早く推進してもらえないか。仙台は全力で案件対応するから」

これを受け、RD部付きの今井礼華さん、鈴木美佐さん、増田萌さんを中心に品川RDUのマネジャーと連携しながら、リモートワーク化に向けた準備が急ピッチで進められた。まず必要なのはインフラ面の整備だった。PCは社内インフラUの皆さんがすぐに対応を開始してくれ、並行して総務Uの方々が携帯電話をキッティングしてくれたことにより、緊急事態宣言発令からたった10日で、全員がリモートワークの環境を構築できた。また社内のデスクに置いていたディスプレイやキー

4月前半の社会・マクロミルを取り巻く主な出来事

4月2日	CLTやFGIなどのオフラインリサーチ案件を中止
3日	世界の感染者が100万人を突破 新卒研修をオンラインで開始 10人超の対面会議や飲み会などは原則禁止
7日	7都府県に緊急事態宣言発令
8日	発令対象エリアの社員は順次自宅でのリモートワークへ移行
9日	新宿オフィスの入居する新宿三井ビル の他社で感染者発生
10日	新宿オフィスへの入館を禁止
11日	国内の感染者が1日としては最多の700名超に
12日	新宿三井ビルの他社にて追加で2名の感染者が発生
14日	Macromill Weekly Index (以下、W)で消費者心理への影響を分析



PCを発送する社内インフラUの和田佑介さん



RDのために100台超のPCが準備された

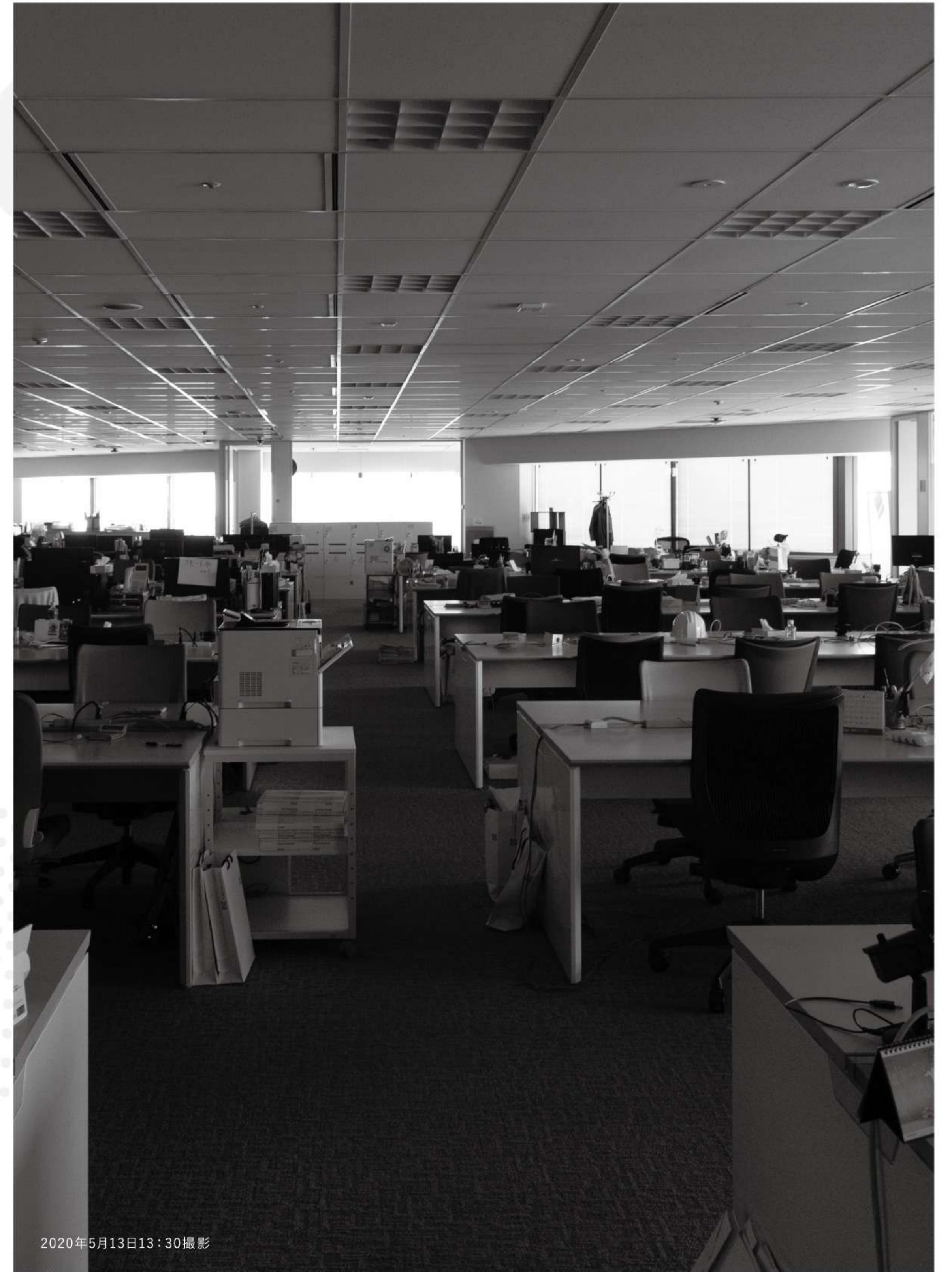
ポードは、田中さん、カスタム、グローバルUのU長大村範之さん、総務UのU長西村碧さんで梱包。それぞれの自宅に郵送した。

リモートワーク化推進にあたり、一番の課題は紙を使わない運用フローを構築することだった。RD部では毎月15万枚の紙を使用している。そのため一部の社員からは「紙を使わない運用なんて無理じゃないか」という声も上がった。運用フローを変えつつ、一方でサービスの質も保たないといけない。RD部付きの3人が試行錯誤しながら新運用フローをマニュアルにまとめ、ノートPCが自宅に届いたメンバーからリモートワークのトライアルを開始した。最適な運用フローやチェックの方法を模索

しながら、毎日のように新しいルールができていく環境の中、品川RDUの皆さんは相当苦勞しながらも、徐々にキャパシティを拡げていくことができた。

当時の判断について、中川さんが振り返る。

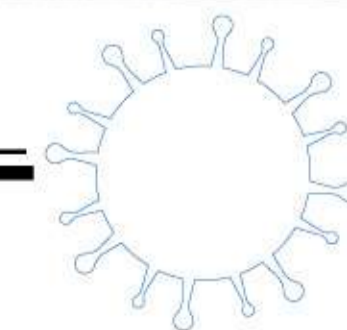
「あの時、もし品川のマネジャーたちに案件を手伝ってもらっていたら、リモートワークの開始時期が二週間は遅れていたはず。そうすると緊急事態宣言が仙台を含む全国に拡大されたタイミングでまだリモートワークができる状態ではなく、RD部の運用力がゼロになつてた可能性もある。運用力は一時的に半分以上下がったけれど、ゼロにならなかったのは品川がいち早くリモートワークのトライアルを始めてく

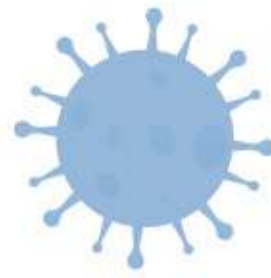


2020年5月13日13:30撮影

4月後半の社会・マクロミルを取り巻く主な出来事

25日	品川本社への入館を再開
23日	政府が月例経済報告で、景気が急速に悪化と報告 内閣府「月例経済報告等に関する関係閣僚会議資料」にW-1のデータ掲載
22日	新宿三井ビルへの入館を再開
21日	品川イーストワンタワーの他社にて追加で1名の感染者が発生
18日	国内の感染者が1万人を超える（クルーズ船除く）
17日	仙台オフィスも順次自宅でのリモートワークへ移行 品川本社の入居する品川イーストワンタワーの他社で感染者発生
16日	緊急事態宣言が全国に拡大
4月15日	品川リバーサイドオフィスの入居する品川東急ビルの他社で疑似症状者発生（追って陰性と判明）





れたから。もちろんこれまでにもリモートワーク化ができていなかったのはちゃんと省みるべきだけれど、本当に良かった」

4月16日に緊急事態宣言が全国拡大されるまでは、仙台RDUの皆さんが出社し事業継続を担ってくれた。総務Uがマスクを手配するなど、感染予防対策もすぐに行った。

また9日には、執行役から仙台RDUの皆さんに対し、オンライン会議で状況説明とともに期待や感謝の言葉が伝えられた。

「社員の健康、感染拡大防止と同時に、皆さんのこれからの生活を維持するためにもビジネスの継続は必要だと考えています。緊急事態宣言により、対象地域の東京と大阪は原則、昨日からリモートワークとしました。経営としてこのコロナの危機を救ってくれているのは仙台的の皆さんだと認識しています。営業の皆さんもクライアントにスケジュール調整をしてくれていて、少しでも仙台の皆さんの負荷軽減を行っています」(佐々木さん)

案件が集中し大変な中、仙台の皆さんの耳には品川の近況も届き始めていた。案件を受けられず、競合に流れていく状況に涙しながら対応する営業さんもいたと知り、「今自分たちができる限りのことをやらなくては」と心したメンバーもいたという。

オンラインリサーチ部

走りながら作っていく

感覚がマクロミルらしい

コロナの影響を受けたのはオンラインリサーチ部だけではない。オンラインリサーチ部は他部署よりも早くから対策を行っていた。

新型コロナウイルスの報道が少しずつ増えてきた1月末。全社アナウンス以前から、会場調査ではモニターさんのマスク着用や消毒を必須にしてきた。ちょうどマスクの需要が高まり、店頭では品切れが起こり始めた頃。総務Uにも手伝ってもらい、5千枚のマスクを一気に調達した。

「マスクを買うのが本当に大変だった。最安値を探しながらも粗悪品を買うわけにはいかない。発売元を数十件調べ、品質を確認しながら電話で納期も聞いて買集めた」(西村さん)

2月からはクライアントより調査の中止判断をいただくようになり、売上にも徐々に影響が出始めた。3月25日には、小池都知事が週末に不要不急の外出を自粛するよう要請。この時、週末には会場調査が控えており、「本当にやるんですか」「そこまでビジネスを優先させる判断で良いのか」という意見が他部署からも上がっていた。

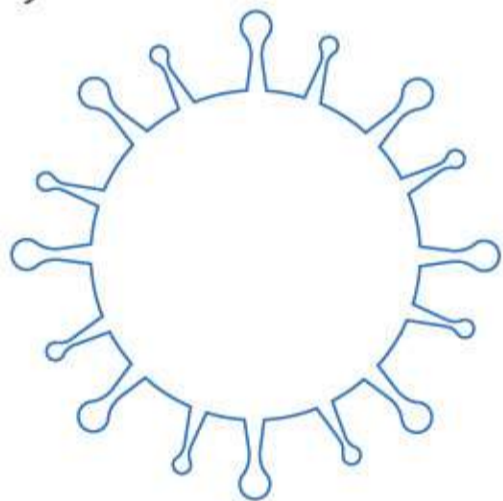
RD部×リサーチ営業本部

社員の安全と事業継続

全国に緊急事態宣言が発令されてからは、仙台RDUも順次リモートワークに切り替えた。それに伴い、お客様から相談いただいた案件を全て受け取ることが難しくなり、一部では全案件のお断りも検討されていた。発令の翌々日、上席執行役員でありリサーチ営業本部を管掌する関口暢康さんが、土曜日の朝に急遽営業部長会議を開催した。

「お客様には極力ご迷惑をお掛けしたくないから、全案件のお断りはしない。ただ運用のキャパシティを考えるとお断りしないといけない案件があるのは事実。営業の皆さんには申し訳ないし心苦しいけれど、こういった案件をお受けしお断りするか、皆でちゃんと精査しよう。今はできることをやっていくしかない」(関口さん)

実施案件の定義を決めた上で、当分の間は毎晩20時から営業とRD部の部長を中心に案件の精査を行った。どれもお客様から相談いただいた大事な案件だが、その中でも特に今マクロミルで行うべき案件がどれかを、一件ずつステータスを見ながら確認していった。



「もちろん中止も検討した。ただクライアントの『課題解決してほしい』という要望にもなんとか応えたいと思う時に、調査は不要不急ではないと判断した。社員の安全が第一なのは当然だけれど、その時はどうにか実施できる方法がないかを探るのが先と考えた」(CLTG長 峠下雄治さん)

その後4月1日までは対面での調査を継続したが、都市圏での感染状況を鑑み2日には全案件を実施中止とした。その中でもクライアントからは定性調査への要望が相次ぎ、3月末に正式なサービスとして発表したばかりのオンラインデブスインタビュー(以下、ODI)に注目が集まった。Zoomのライセンスト、1日に5案件までしか実施できなかつたが、それを超える数の相談が寄せられたという。

新しいスキームの構築が必要だったため、当初はフィールドGの大竹智之さん、宮阪英明さん、G長森裕馬さんや峠下さんなどを中心に限られたメンバーで運用を開始。これまでリアルで行ってきた調査を、いかにZoomで代替するか考えながら走り続ける日々が続いた。

「この走りながら一緒に作っていく感覚が、なんかマクロミルっぽい。整理されていない部分も多く、迷惑も掛けたと思いますが、前向きに意見を出して協力してくれた皆の力でこれだけ

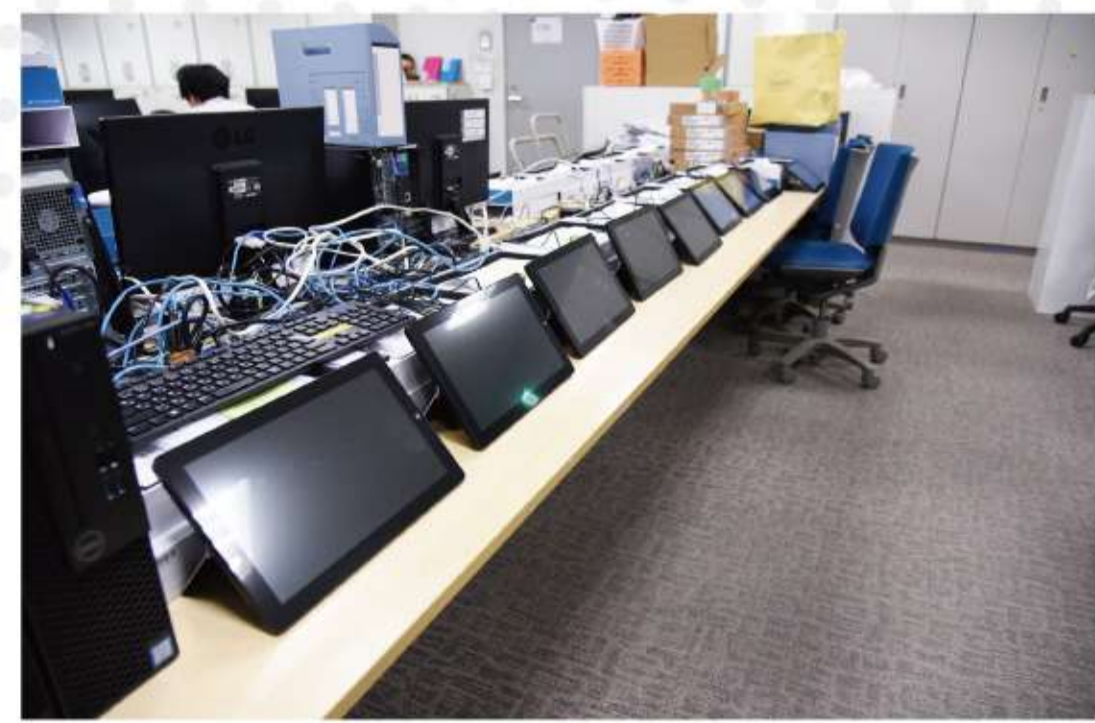
運用のキャパシティを最大化させるため、RD部も全力を尽くした。ほとんどのメンバーが休日も数日稼働したり、カスタム・グローバルU、グローバルリサーチ本部やオンラインリサーチ部などからもサポートしてもらったりした。またチェックの効率を上げるため、タブレットの導入も急遽決めた。

休日稼働についてはもちろん様々な意見が寄せられた。その頃のRD部総会ではこうしたメッセージが伝えられていた。

「案件を多少失ってでも、会社としてはとにかく社員の安全を大切に考えてきた。社員の皆さんが大事だけれど、会社はお客様がいてこそ成り立つもの。どちらも守らないといけない。リモートワーク化が成立してきた今はお客様に目を向けて、事業継続という観点からおお客様の信頼を少しずつ取り戻していこう」

他部署のサポートも得ながら、RD部の皆さんがお客様と必死に向き合った結果はすぐに数字として表れていった。たった1カ月で、これまでの運用キャパシティの8割を実現。この結果はRD部のマネジャー陣から見ても驚きの数字だった。

「リモートワーク実施前は、正直ここまでキャパシティを上げられると思っていなかった。でも営業さんには申し訳なかった。せつかく受注した案件を



社内インフラUが急遽タブレットも用意してくれた

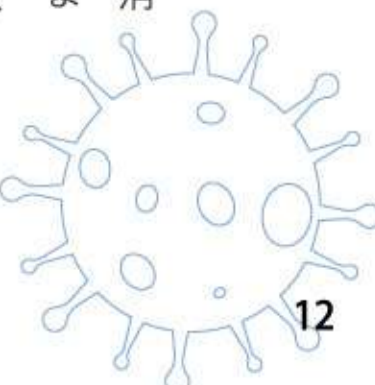
断らせてしまったことは、今まで解消できていなかった会社や組織課題によるもの。営業さんが案件を調整してくれたから、RDは安全を最優先にする舵が切れた。申し訳ないと思いつつ、本当に感謝しています」(田中さん)

「今まで『絶対に紙が必要』とあんなに言ってきたけれど、思い切って変わるこの大事さを実感した。これを教訓に、今まで無理と判断してきたことに取り組んでいきたい」(中川さん)

社員の安全が最優先ながら、皆の生活を保障していくためには事業継続も大事なこと。未曾有の事態に翻弄されながら、両者のバランスを模索していく難しさを誰もが感じた一カ月だった。

5・6月の社会・マクロミルを取り巻く主な出来事

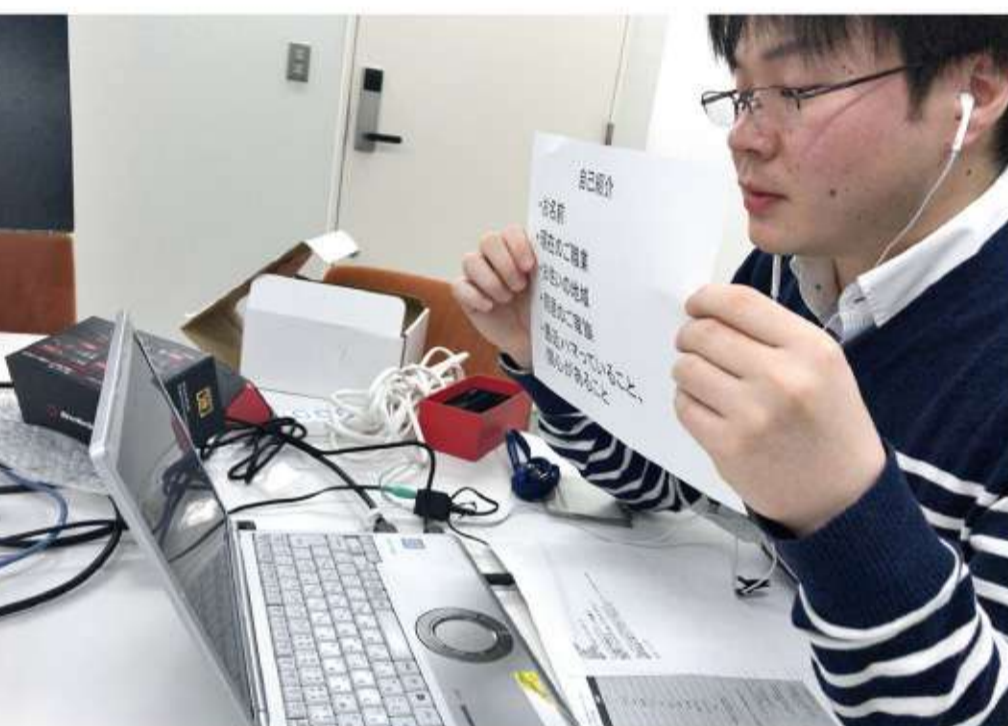
5月4日	緊急事態宣言が31日まで延長
7日	国内の感染者が1日につき1000人を下回る
13日	2020年6月期 第3四半期決算説明会を予定通り実施
14日	緊急事態宣言が39県で解除。8都道府県で継続
18日	仙台オフィス・名古屋営業所は段階的に出社を再開
21日	緊急事態宣言が関西も解除。首都圏と北海道は継続
25日	緊急事態宣言が全国で解除 関西支店・東京のオフィスでも段階的に出社を再開
6月2日	東京アラート発令(11日に解除)
12日	6月の出社時におけるガイドライン発表
20日	世界における1日の感染者数が15万人超と最多に



売上を上げられた。感謝しています」
（1G長 石上和也さん）

日々ODIを運用する中で、モニターさんやお客様の調査に対する関わり方にも変化が見られたようだ。

モニターさんは会場よりも家の方がリラックスして参加できる方もいるようである。ある案件では途中でタバコを吸い出す方や、お酒を飲み始める人も出てくるなど、これまでの会場調査では起こり得なかった出来事が本社内でも話題になった。



ZoomでのODIサービスリリースに向け検証調査を行う大竹さん

「モニターさんの背景に自宅が映ると、言葉以上にその人の生活が見える時がある。中にはそれを楽しんでいるお客様もいらっしゃった。『この方、家の置物がセレブっぽい。だからこういうジャンルを選んでいるのも分かるよね』とお客様同士で会話のネタになっていたこともありました」（宮阪さん）

「家も一つのプロフィールだと思う。そしてこんなに人の顔をまじまじと見られるのもオンラインだからこそ。それ以外にもリクルートの範囲が全国に広がったことで、様々な地域の人の話を聞きたいという新たなニーズにも応えられている。実はメリットも多かった」（峠下さん）

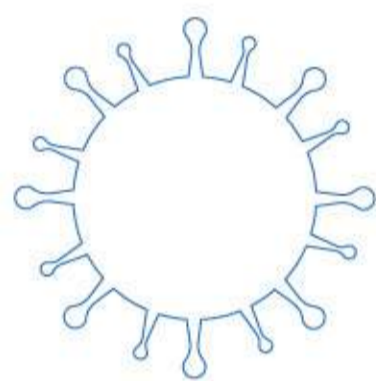
ODIの本格稼働により、お客様へ新しい価値提供ができています。

ている。普段から故障や退会などの理由で返却される機器を受け取りつつ、故障した場合は一日でも早く新しい機器を返送し、退会者が出たらその分新しいモニターさんに機器を送りパネルを構築してきた。そうしないとその間の取得データが欠けてしまうからだ。

「QPRは10年以上継続してきた大事なサービス。サービスの価値として、継続的にデータが取れていないと意味がない」（運用UU長 鈴木昌彦さん）

ちょうど4月頃はYMAPのサービス終了に伴い、週に400個近くもの機器が返却されてきたり、新しくQPRモニターに協力してくれる1200名に端末を配送したりするタイミングでもあった。荷物受け取りや発送対応は今までアルバイトさんに依頼してきたが、アルバイトさんが自宅待機となる中、多くの社員が交代で出社しながら対応した。

「皆には通常業務を対応してもらいつつ、さらに出社して荷物受け取りや発送してもらった。依頼側としては心苦しい部分もあったが、メンバーもサービスを守ることの重要性を理解してくれていて『必要なので頑張ります』と快く対応してくれた。出社しない社員も他業務を積極的に巻き取って、仙台のメンバーとも連携しながら皆の総力でなんとか乗り越えられたと思う」（モニターGG長 辻幸作さん）



財務経理本部では、紙対応が必要な立替経費精算の提出期限を延期し、経費や外注費の提出を「e-books」で受け付けるなどの特別措置を行った。また請求書の発行についても対応変更が余儀なくされ、出社できないクライアントの状況も加味したイレギュラーな対応を実施。中にはどうしても出社が必要な業務もあったが、ほとんどの社員はリモートワークへ移行。分担した業務をそれぞれが責任を持ってやり切り、第3四半期の決算発表も期日通りに実施できた。

「メンバーに開示完了を報告したら、『こういう状況でもオンスケでできたのはすごい。コロナが明けたら皆で飲みたいね！』という声が上がりました。リモートワークになって良かったのは、チームワークの良さが確認できたこと」（第1経理GG長 松本浩さん）

「何か困っている人がいたら誰かが自然と助けてくれていた。だからリモートワークでも業務が成り立ったのだと思う」（第2経理GG長 中村俊之さん）

決算発表を延期する企業も多い中、財務経理本部やR・ステークホルダーズコミュニケーション室による頑張りやチームワークが奇跡を起こした。同じくバックオフィスの総務Uも、社員が交代で週3日出社。郵便物の回収や宅配便の受け取りを行った。また社員の出

チームワークで乗り越える

PQMGエムキープ・バックオフィス

4月から5月にかけて、いくつかの部署では時に出社しながら業務を行った。その中でもパネルクオリティマネジメントG（以下、PQMG）、エムキープ、財務経理本部や総務Uなどバックオフィスの動きを取り上げる。

PQMGでは毎月、モニターさんへアンケート協力の謝礼をお支払いしている。その中でも交換比率が一番高い銀行振込みは、一部のモニターさんにとって生活に大きく影響している状態だという。しかし銀行振込みは、電子証明書がインストールされたセキュア端末からしか操作できない状態になっているなど、リモートワーク環境では期日中の振込みがどうしても難しく、グループ内で散々議論したが心苦しくも延期対応を決めていた。その旨をモニターさんにお詫びすると、中には「生活がかかっているので何とかでも振込みしてほしい」という切迫した声や厳しいお叱りも届いた。期日での振込みを諦めきれないメンバーからも、「本当にどうにかならないものではないか」という声が上がっていた。

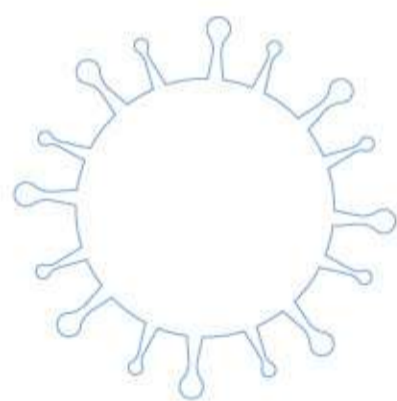
セキュリティレベルを保ちながら、リモート環境でも事業継続できる状態にしないとイケない。社内インフラUの知恵を借りつつ、経営陣と何度も議論し、最終的に何とかリモート対応に漕ぎつけることができた。

銀行振込み完了までは引き続きいくつかのハードルがあったが、PQMGのG長である横田理恵子さんが出社して対応するなど煩雑な工程を一つずつクリアし、最終的には銀行振込みを何とか期日に間に合わせることもできた。

「メンバーがコロナに感染することへの不安はもちろんありましたが、リモート環境で個人情報の事故が起こることは絶対に避けなければいけませんでした。万が一事故が起これば、即座に事業は停止に追い込まれ、最悪会社が飛ぶ可能性だってある。結果的にマクロミルは社員の安全と事業継続とを考えた柔軟な判断をしたと思うし、社員を最優先に考えてくれて感謝している。でもそれは私たちが信頼して委ねてもらっているということ。いつも以上に責任が重く、事故なく対応できたのはメンバー皆のおかげ」（横田さん）

QPRやYMAPなどの調査パネルを構築するエムキープでは、購買データやテレビ視聴データを収集するため、モニターさんに機器を送付し

社再開に備え、5月には非接触型体温計や70Lもの消毒用アルコールを購入し、各拠点に設置した。さらに本社の扉を毎日除菌するなど、感染防止のためオフィスを除で支えてくれた。

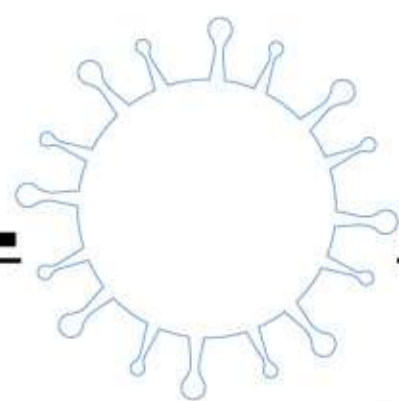


決算発表を直前に控え、対応に追われるIRと財務経理本部の皆さん



モニターさんに送る案内書類の発送作業を行う辻さん





「出社は交代制にしています。発送や受け取り、各種手続きなどを終日一人で対応するのは結構大変です」(総務U 伊藤藍子さん)



労務Uは主にリモートワークで稼働しながらも、「国や自治体など紙でしか対応できない業務も一部あり、限定的に出社している」(鈴木葵さん)

社内インフラU

**「医療従事者」
マクロミルの**

このコロナ禍でもっとも激動だったのは、社内インフラUの皆さんかもしれない。全社が急遽リモートワーク体制に移行する中、「Wi-Fi」の容量を早く上げてほしい」「Zoomのセキュリティは大丈夫なのか」などと捌ぎきれないほど大量の問い合わせが一気に集中。分単位での対応に追われた。特にノートPCの手配が大変だった。もともとPCは人員計画に基づいて確保してきたため、当初社内には限られた数の在庫しかなかった。慌ててレンタル会社に相談し、数時間おきに在庫数を確認しながら、皆がPCをすぐ使用できるようにキitting作業を進めてくれた。

「社内インフラUのキittingが、特にRD部のリリース確保になり売上に繋がる。いかに早く捌けるかの勝負だった。感染リスクがある状況の中、もし社内インフラUの皆に何かあったらと思うと心配で仕方なかったけれど、それでも皆が対応しないと会社がまわらない。かなり無茶をして一部の皆さんには出社してもらった。当時、



2020年5月13日13:30撮影

管掌執行役の清水将浩さんとは「医療従事者と同じ状況だ」とよく話していた(Globa U本部 本部長 遠藤直子さん)

社内インフラUの皆さんが平日は朝8時から22時超まで作業し、特にU長の山下雅裕さんは休日も出ずっぱりで対応を進めてくれた。そのおかげで、緊急事態宣言が発令されてから10日も経たないうちに1000台超のPC手配が完了した。

「もちろん大変だったけれど別に辛いは思わなかった。東日本大震災の時もサーバーを守るために一人で残った経験があり、こういう事態に最後まで残って対応することが自分の仕事だと思っていたから。それに社会全体が経済的に厳しい状況で、マクロミルが少しでも良い状況でいるために立てるなら、それが自分のためにもなると思ってた」(山下さん)

PC手配完了の翌日に、品川イーストワンタワーの他テナントで感染者が発生。本社入館が急遽1週間禁止された。PC手配は本日にタイミング良く、ギリギリ間に合った状況だった。

このコロナ禍による変化を、遠藤さんや山下さんはポジティブに捉えている。「もともと山下さんを中心に働き方改革やBCPを前提とした社内システム構想を進める中、リモートワーク拡大は重要なポイントでした。それで

も、社内ではフルリモートに対して実現性に疑問を持たれたり、セキュリティやコスト効率の課題があったりと、インフラ改革にはより時間がかかる想定でいました。今回のコロナ禍ではそれが一気に押し進められた。突貫ではあるものの、リモートでは困難と言われていた業務やクライアントとの打ち合わせなど外部との接触もリモートに変化した。真の業務効率を上げていくためにはまだまだ工夫が必要であるし、セキュリティの難易度も上がるけれど、有事の際に事業継続するための環境づくりや働き方改革を様々な面からスピーディーに推進していくきっかけになったと思う(遠藤さん)

まとめ

たった3カ月で、仕事の進め方や働き方は大きく変化した。

誰も先行きを予想できない中、急激な変化をどうにか乗り越えられたのは全社員の努力と創意工夫、そして部署を超えたBORDERLESSな連携があったからに違いない。



本との向き合い方が変わる

『読書について』

アルトゥル・ショーペンハウアー



大学時代に出会い、本との向き合い方を意識するようになった1冊。本からいろいろな経験を得つつも、自分の軸を持ち、自分でものを考えることを大事にするようになりました。「読書は他人にものを読ませてもらうことである」という一文、本好きな人はドキッとするかも？



人事部人事企画U
大角桃子さん

新しい視点を 得たい人に…



僕の人生観に影響を与えてくれた

『恋文の技術』

森見登美彦



『恋文の指南書』として購入したら中身は「ただの腐れ大学生の話」という、とんでもない詐欺みたいな小説です。しかし机上の空論で構成される物語が進むにつれて、こんな日々なら楽しいだろうと思わされてしまいました。主人公の滑稽に見える毎日、本人にとっては苦しいものです。しかし周囲はそれを面白がって構ってくれる。自分の視点ばかりで見ていると苦しい事柄も、誰かから見れば面白いのならそれは明るい世界だなと。それはそのまま僕の人生観となりました。

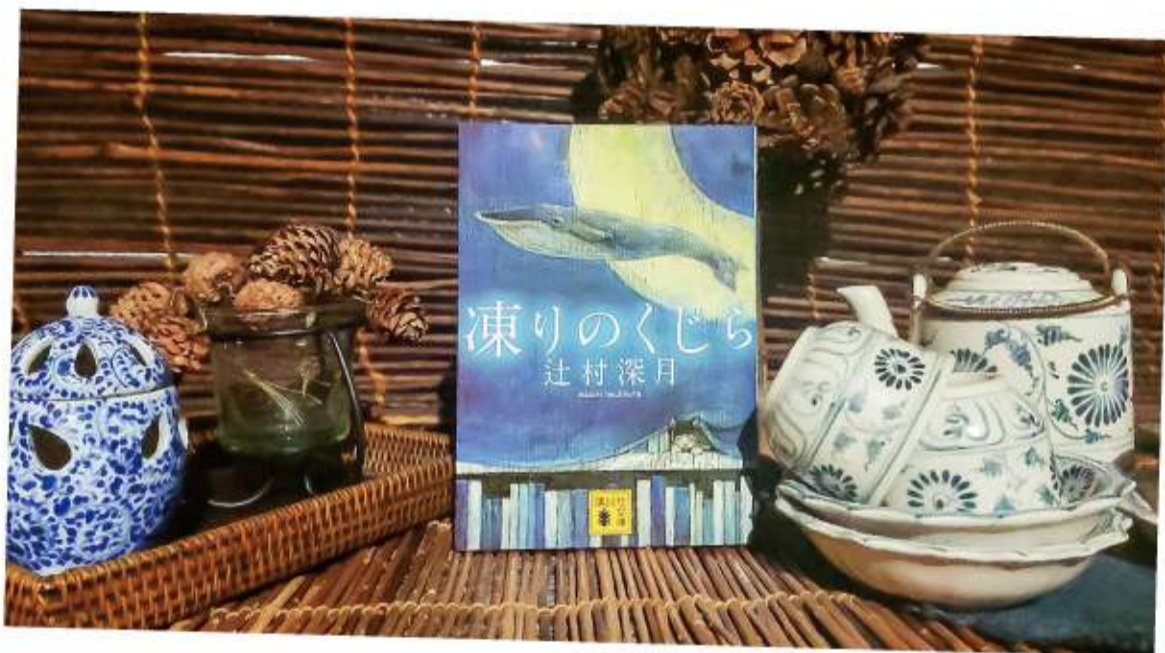


統合データ事業本部 データマネジメント部3G
脇田光さん

没入感を味わえる

『凍りのくじら』

辻村深月



表紙とタイトルに惹かれて読んだ1冊です。何気ないことでも、考え方や見方によって形が変わるのだと感じました。この本を読んでいると目の前にその情景が広がり、本の中に入ってしまったような気持ちになります。「凍りのくじら」を読んでから、小説を読むことがこれまで以上に好きになりました。



リサーチアーキテクト本部 カスタム・グローバルU
グローバルディレクションG
車田菜摘さん

主人公に自分を重ねています

『アオアシ』

小林有吾



今、最もアツいサッカー漫画です。田舎民が猛者たちの揃うユースの中で、必死にもがきながら成長していく姿と、自分を重ねながら、もっと頑張ろうと思っています。(笑)



リサーチアーキテクト本部 リサーチディレクション部
仙台RDU1G
井上慎太郎さん



あの人のおススメ! 読んで良かった本・漫画

「この本を読んで壁を乗り越えた」「この漫画に勇気もらった」など、皆さんの身近な社員が、これまでの人生において影響を受けた本や漫画をエピソードとともにご紹介します。あなたの力になる1冊を、ぜひ探してみてください。

Q. ①から⑤の本棚はマクロミル社員のものです。誰の本棚でしょうか？ 正解はP22をご覧ください。



プロフェッショナルであるために

『心を整える。勝利をたくり寄せるための56の習慣』
長谷部誠



前職の頃、2011年にシンガポールへ赴任する際、仲の良い同期からプレゼントしてもらった本。飛行機内で読み、これから仕事に対してどのように向き合っていくかと内省しました。若い長谷部さん(当時25歳)がプロフェッショナルであるために、日々丁寧な準備を行っていることに感銘を受けつつ、自分もプロフェッショナルであるはずだと改めて自覚を持ちました。赴任後はベトナムとの行き来が多く、移動時間が多かったこともあり、座右の書として、長谷部さんの薦める「意識して心を鎮める時間を作る」や「偏見を持たず、まず好きになってみる」「迷ったときこそ、難しい道を選ぶ」ということを実践するようになっていきました。



人事部人事企画U
森澤隆行さん

モチベーションを アップさせたい人に…



マーケティングってこういうことか!

『売れる会社のすごい仕組み』
佐藤義典



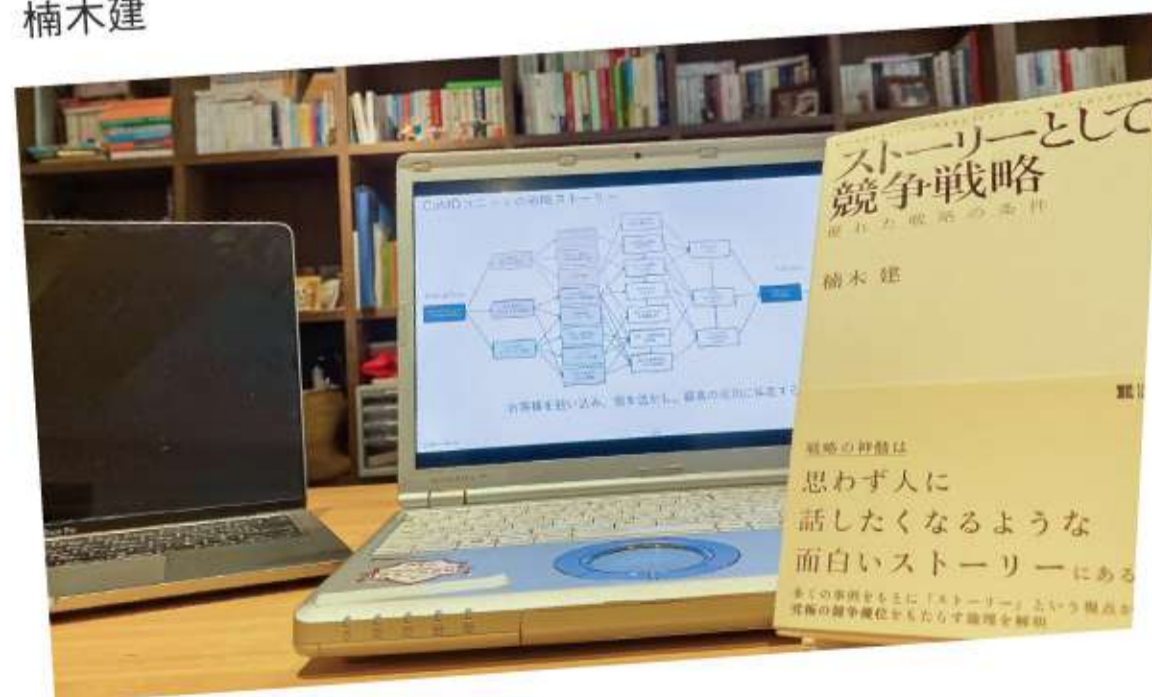
入社2年目の初めに、伝説のRU渋谷智之さん(現・統合データ事業本部)にお薦めしてもらった本です。「蛭原はマーケティングを知らなさすぎ」とお叱りを受け、「とりあえず、これ読んでみたほうがいいよ」と言われ購入しました。マーケティングのことを分かっているような気になっていましたが、この本を読んでやっと腹落ちした感覚があります。自分の身の周りにあふれるお店や商品はどのようなマーケティングをしているのだろうか?と興味を持って考えられるようになったのも、この本がきっかけです。



リサーチ営業本部 FMCG第2営業部2G
蛭原千晶さん

戦略の描き方を学びたい人、必読!

『ストーリーとしての競争戦略』
楠木建



社会人3年目の時、大手不動産会社の社長に対して、経営方針に提言する機会をいただきました。その際にどうすれば戦略を描けるのだろうか?と思い、当時の役員に薦められて買った本です。当時読んだものの、正直なところ「スターバックスのコンセプトはサードプレイス」という部分ぐらいしか覚えておらず、最近読み返したら衝撃を受け、心を揺さぶられました。



リサーチ営業本部 第2営業部
木下悠さん



女性なら誰もが共感できるはず

『サブリ』
おかざき真里



女性としてのキャリア・人生にふと悩む瞬間が訪れた時、私だけではなく、働く女性だったら同じような悩みを持って頑張っているのかもしれないと勇気をもらいました。



リサーチアーキテクト本部 リサーチディレクション部
品川RDU3G
片岡茉理さん

今後の生き方を 迷っている人に…



キャリアを見つめ直すきっかけに

『働き女子が輝くために28歳までに身につけたいこと』
漆紫穂子



私の母校の校長先生(当時)が書いている本で、出版の連絡を聞き読んでみました。もともとキャリア教育が盛んな学校でしたが、働き始めて数年経ったタイミングで読むことで、改めてどんな風に働いていきたいのか、どんな人生を歩みたいのか、自分のキャリアを見つめ直すきっかけになりました。



リサーチアーキテクト本部 リサーチディレクション部
品川RDU2G
河野あゆみさん

岐路に立ったらとにかく読むべし!

『水滸伝』
北方謙三



志とは何なのか。生きる意味を問い続ける熱き漢達物語。学生時代から岐路に立った際には何度も読み続けてきた。人生に迷ったら兔に角読むべし!19巻長いとか108人の名前が全部漢字とかそんな話ではない。仕事なんかしていないで、兔に角読むべし。北方謙三の魂の叫びを感じろ!



執行役員
大畑翔柄さん

大学2年の夏に寄り添ってくれた一冊

『異邦人』
カミュ



大学生の時はほとんど学校に行かず、深夜にコンビニでバイトをしながら、家で本を読む生活をしていました。大学2年生の夏に読んだ本で、その時の暑さも漠然と抱いていた不安も特に解消はされなかったのですが、まるで自分のことが書いてあるように感じた小説です。



統合データ事業本部 データマネジメントプラットフォーム部
アナリティクス&テクノロジーG
川口世人さん

もっと読んでみたいと思ったあなたに+α

他にもおススメの作品をたくさん紹介してもらいました。あなたが置かれた状況やタイミングにあわせて、とおきの1冊を見つけてみてください。

『精霊の守り人』
上橋菜穂子



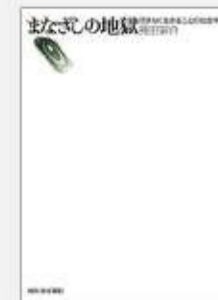
上橋先生の作品は面白い話が多く必読。もはやエピソードとか関係なく読むべし。(大畑翔柄さん)

『田中角栄という生き方』
別冊宝島編集部



マネジャーという立場になって読むとグッとくるものがあります。(金子恒彦さん)

『まなごしの地獄』
見田宗介



自分もこのような文章を書きたいと思い、大学院への進学を決意した気がします！(川口世人さん)

『しあわせの理由』
グレッグ・イーガン



未来の社会のあり方を想像するさまざまなギミックが盛り込まれていて、お気に入りの1冊です。(大角桃子さん)

『企画力』
田坂広志



自身の企画書や企画立案において大事にしていることは、ここに書いてあることが多いです。(木下悠さん)

『自分の小さな「箱」から脱出する方法』
アービンジャー・インスティチュート



人間関係で悩んだ時に何度も読み返し、毎回涙した作品です。(瀬川順弘さん)

『挫折を経て、猫は丸くなった。』
天久聖一



人生は選択の連続ですが、選択の先をいかに面白く想像するかのヒントが詰まっています。(脇田光さん)

『イシューからはじめよ 知的生産の「シンプルな本質」』
安宅和人



迷ったときはこの教科書を開いて、イシューを見極めることを試行錯誤していきます。(蛭原千晶さん)

『マンガでやさしくわかるU理論』
中土井僚



「コミュニケーションをとることが、どういうことが向き合うきっかけになった本です！」(河野あゆみさん)

『アルケミスト 夢を旅した少年』
パウロ・コエーリョ



思い悩んだ時になんとなく読んでみると、たくさんの気づきを与えてくれる1冊です！(井上慎太郎さん)

『はじめてのリーダーのための実践！フィードバック 耳の痛いことを伝えて部下と職場を立て直す「全技術」』
中原淳



マネジメントの本を読んで、今日から実践してみようと思えた1冊です。(片岡茉理さん)

『なぜ、「すぐに決めない」リーダーが結果を出し続けるのか？』
中村一浩



タイトルをみると、一瞬「えっ!？」となりますが、読んでみると至極納得できます。(森澤隆行さん)

四者四様のキャプテンシーに学ぶ

『キャプテン』
ちばあきお



古い野球漫画ですが、「リーダーとは」ということを深く学べる内容だと思います。ある野球部を舞台として、4人のキャプテンにどんどん代替わりしていくストーリーです。四者四様のキャプテンシーや、失敗と成功があり勉強させられます。アツイ少年漫画で、内容を思い出すだけでも目頭が熱くなります。



年に一度読み直しています

『キャプテンシリーズ (1) ~ (3)』
後藤竜二



児童書ですが、学ぶことが多い本です。初めは小学校の図書室で読んだ気がします。主人公は、キャプテンをやりたいなかった弱小チームの野球少年。彼の成長していく姿が爽快です。さらに人間的な成長を見ていると考えさせられるところがあり、年に一度、3巻全部を読み直しています。児童書なのですぐ読めるところも良いですね。



統合データ事業本部
データマネジメントプラットフォーム部
瀬川順弘さん

リーダー像を
模索している人に…



今の時代に必要なリーダーって？

『宇宙兄弟』
小山宙哉



人生のバイブルで、数々の名言を自身に置き換えています。元々、宇宙が好きだったので読み始めましたが、特別な能力を持っているわけではなく、いつもダメ出しをくらう主人公のキャラクターにだんだん惹かれました。彼がいるとなぜかチームがうまく回り、「あいつと宇宙にいきたい」と言われます。強い推進力を持ったリーダーも必要ですが、よほどのカリスマ性がなければ、今のご時世リスクが大きいと思います。「こっちいくぞ!あ、崖だった。戻るぞ!」では、戻る時の周りのテンションは牛歩並です。主人公は、「こっちだと思。みんなはどう思う。ではこっちに行こう」です。例え崖であっても、戻る時のテンションは全速力だと思います。主人公のようなリーダーになりたい。みんなと一緒に遠くまで行きたい。そう思わせてくれる漫画です。



統合データ事業本部 データマネジメント部
アナリティクスG
金子恒彦さん

A. 本棚の答え合わせ



1 脇田光さん



2 森澤隆行さん



3 蛭原千晶さん



4 木下悠さん



5 瀬川順弘さん

皆さんのおススメを参考にぜひ読書を楽しんでくださいね!
P19~22で紹介した本や漫画は、読者プレゼントとしてご用意しています。応募方法はP35をご確認ください。

Special Interview

Lully Miura

プロフィール

三浦瑠麗 (みうら・るり) さん

国際政治学者・山猫総合研究所 代表

1980年10月神奈川県茅ヶ崎市生まれ。幼少期を茅ヶ崎、平塚で過ごし、県立湘南高校に進学。東京大学農学部を卒業後、同大学大学院法学政治学研究科総合法政専攻博士課程修了、博士(法学)。同大学大学院公共政策大学院専門修士課程修了。日本学術振興会特別研究員、東京大学政策ビジョン研究センター講師などを経て2019年より現職。博士論文を元にした『シベリアンの戦争—デモクラシーが攻撃的になるとき』(岩波書店)でデビュー後、『日本に絶望している人のための政治入門』(文藝春秋)など著書多数。「朝まで生テレビ!」「とくダネ!」「ワイドナショー」などテレビでも活躍する一方、旺盛な執筆、言論活動を続けている。

気鋭の国際政治学者としてその発言がメディアでも注目を集める三浦瑠麗さん。政治や社会問題について、数字やファクトをもとに鋭い意見を述べる姿が印象的であり、政治学の世界にマーケティングの手法を持ち込んでいるおひとりでもあります。今号からスタートする著名人インタビュー企画の第一弾として、今回はマクロミルのクライアントでもある三浦さんのデータ活用術に迫ります。

“政治にもデータサイエンスの知見が求められている。
政治をもっと身近なものに変えていきたい”

日本では大手新聞社やテレビ局などが大変な予算を使って世論調査をしています。残念ながら支持率把握や選挙の勝敗予測に偏っていると思います。例えば最近では「緊急事態宣言」に対する賛否や、内閣支持率などの数字が連日報道されました。しかし「賛成」や「支持」の人がどういう理由で、一体どういう熱量で「はい」と答えたのは明らかにされていません。さらに、支持率何%という数字だけが独り歩きすることで、多くの人が意見を失ってしまうという現象も。そこに、長年の「勘」に基づいた記者の解説が加えられて、霞ヶ関や永田町およびメディアの雰囲気となって返ってくる。これは十分に科学的ではないですし、「なぜそうなのか」を考えることなしにこの数字だけを根拠とした意思決定に流されていくことにもなりかねないという危険があります。

米英では政治の分野でも調査データの活用がかなり進んでいます。私はこれを日本に取り入れたいと思っています。また、調査過程において、回答者側も自分が一体なぜそう思ったのか、なぜ支持に○を付けたのかということを理解できるように発信して返していくことで、少し偉そうな言い方になってしまいかもしれませんが、有権者教育にもつながっていくと考えています。

三浦さんはいつもデータや数字を根拠に発言をされています。背景にはどのようなお考えがあるのでしょうか？

日本の世論調査は十分に科学的ではない

Special Interview

社会やビジネスの第一線で
“BORDERLESS”に活躍する人への
インタビュー企画

VOL.
01

国際政治学者
三浦瑠麗さん



周囲から強烈に反対された、マクロミルでの初めての調査

初めて自分で調査を行ったのは、「東アジア・パラドックス※」について自分なりに調査したいと強く思ったのがきっかけで、2014年に御社に依頼して日中韓3カ国調査を実施しました。私はこの考え方に懐疑的な立場で、それを客観的に世の中に示したかったのです。しかし当時は所属機関が外務省の助成を受けていたこともあり、成果が出るかどうか分からない若手の研究に多額の予算を投じることに抵抗がありました。仮説検証型の調査にはなじみがなく、理解が得られにくかったのです。

※「東アジア・パラドックス」とは、国際化が進んで相互依存が進むと世の中は平和になると言われているが、東アジアだけは例外とする説。経済的には相互依存しながらも、日中韓にはそれぞれ政治的摩擦があり、北朝鮮という存在もあるため、東アジアは火薬庫であり、紛争危険もあれば歴史問題も解決しないという考え方。

調査を行ううえで苦労されたことはありますか？

中国にはそもそも世論調査が存在しません。独自に政治的な意識調査をする場合でも、関係人脈に気を遣い、体制に忖度をしながら調査を進めなければ協力は得られない。その結果として、意識調査では禁じ手であるはずの手法を取っている団体の成果物

人材育成の観点からは、産学官の垣根を越えた人材交流の活発化や、10年先、20年先も見据えて高校生くらいからデータリテラシー教育を行っていくことも必要でしょう。ひとつのヒントとして、行動経済学の分野では身近なものを題材に子どもたちに教えるということをよくやっています。こうしたアプローチはファン層を広げると思いますし、社会・政治問題×データサイエンスにおいても、もっとみんながワイワイと語れるような場を持ち込んでいきたいですね。私自身も、調査結果と孤独に向き合っていることも多いので、マクロミルの専門家の皆さんとデータ読み解きのプレストなどができるととても嬉しいです。

マクロミルに今後期待したいことはありますか？

政治分野にマーケティングの知見を持ち込み、積極的な社会発信も行ってほしい。

敢えて申し上げるならば、パネルの質をさらに高めると同時に、無作為抽出ではないネット調査が現実（無作為抽出の調査）とどれくらい合致している、あるいは合致していないのかを、客観的に外部に示せる資料が欲しいということでしょうか。

私が参考にした研究者グループによるYouGovを使った米国有権者の価値観調査では、何回も回答者にインタビュアをくり返して、無作為抽出をくり返していました。その

がお墨付きを得ることがよくあります。例えば「日本を嫌いな理由」を聞く場合に、特定の仮説に誘導するようなものがそれに当たります。回答選択肢に「帝国主義的だから」「国際法を守らないから」などの部分的で政治的な理由ばかりが示される誘導的な質問が多かったり。こうした調査ではなく、偏見を排除した調査設計をするように気をつけました。しかし、調査の意義が理解され受け入れられるのには苦労しました。ただし、調査主体の偏見が混入する可能性は中国にとどまりません。日本においても、例えば自民党に投票した人にその理由を聞く際、「他に代わる政党がないから」「信頼できるから」などいくつか選択肢を並べます。それだけでもっともらしいのですが、でもよく考えるとどれももっともらしくないんですね。そんなに代弁してあげる必要があるのかと。ある種の誘導になっていないかとも思うわけです。

バイアスの問題や潜在意識の捉え方などはマーケティング調査にも置き換えられる話ですね。設問設計や分析時に他にはどのようなことを意識されているのでしょうか。

まず、「自分は〇〇について調査されている」と意識させないことには留意しています。日中関係に関わる調査であっても、インドやロシア、オーストラリアなどを設問に入れたり。これだけで数字の出方が大きく変わってきますね。もう一つは、なるべく行動や相関で物事をはかること。例えば、好意度

結果、政治意識が高まってしまい、実際には偏ったパネルになってしまっているようにも思うのですが、残念ながら論文の世界ではこのようなパネルのほうが認められやすい。しかし実際には、2019年参院選の比例代表の投票先を確認した御社パネルでの調査結果は、驚くほど現実と一致していました。選挙区レベルまで細かく割り付けをしたある東大研究室の結果ともほとんど変わっていませんでした。

御社のパネルがマーケティング調査のため構築されていることは承知していますが、ライフスタイルからはかけ離れていない範囲で、公益的なテーマにも取り組まれてはいかがかと思えますし、願わくばアカデミックの領域においてもっと市民権を得たいですね。

また、私がマーケティングの手法を政治学に持ち込もうとしたそもそもの主旨でもあるのですが、マーケティングの知見は政治学にも活かれます。例えば、日韓の関係に対する人々の素の考えを聞きたいのであれば、いきなり1問目から慰安婦問題について聞くことは、かえってバイアスをかけてしまう。こうした基本的問題を改善していくうえでマーケティングリサーチや御社のノウハウは非常に有効だと思えます。

山猫総合研究所のHPでは、簡単なアンケートに答えるだけで自分の社会的価値観や立ち位置を簡単に把握することができ、「診断テスト」を提供している。人々にとって政治がもっと身近なものになることや、自分自身の価値観理解を深めてもらうことを目指している。(下図)

を測る際、好き嫌いに加えてその国や人に対して多様なイメージを聞くようにしています。この相関を見ることで、強い関心をともなう「好き」なのか、よく知らないが何となくいいイメージの「好き」なのかまでよく分かりますし、何が一番「好き」に効いているのかやどのよう個性が認識されているのかもその散らばりから確認しています。あとは例えば、日本人は真ん中に○を付けて「あなた、弊社の調査ではあえて「よく分からない」「どちらでもない」といった中間回答は入れないか、最後に置くようにするといったことも気を付けています。

政治×データという意味では、政府や自治体が新型コロナウイルスの感染状況把握や、出口戦略を検討する際にもデータサイエンティストが裏で活躍していました。これからのデータサイエンス分野や専門人材育成について期待されていることはありますか？

日本はもっとデータサイエンス人材に投資すべき

調査を行うだけでなく、分析した価値をしっかりと理解してもらい、それにお金を払う人が出てくる社会にもっと変えていく必要があると思っています。人材は投じられた富の量に比例しますから。政治におけるデータ活用というのは残念ながら最もお金が使われていない分野なのですが、例えば小選挙区制の導入後には、各選挙区にまつわる「長年の勤」のような知見が役に立た

なくなっていたり、今後AIが進化していけば、例えば私が調査で示してきたようなことも、もはや示す必要もなくなっているかもしれない。こうした流れからもデータ活用の重要性はますます高まり、これに長けた人材が活躍する場は広がっていくのではないのでしょうか。



七期の思い出 川柳

働き方改革、20周年、新型コロナウイルス、リモートワーク。7期は社会の変化に伴い、マクロミルでも大きな動きが沢山ありました。そこで7期の思い出を振り返るべく、皆さんから川柳を募集。ユニークな作品が多数寄せられた中でも、特に優れた作品を執行役、執行役員の方々に選んでいただきました。



川柳は5月中旬から下旬にかけ、全社メールやNOWで募集。中には複数作品を応募してくれる方もいました。
(イラスト協力・統合データ事業本部 統合データ営業部 デジタル営業1G 増田優作さん)

最優秀賞

新卒社員を代表しての一句

社員証

いまだにピツて
したことをない



リサーチ営業本部 第4営業部
大越初音さん

作者の声

新卒入社して2カ月ですが(5月末時点)、入社したのは4月1日にパソコンを受け取りに行った3時間ほど。社員証を首から掛けたこともないし、入社したらどこに行ってもいいのかわかりません。同期と早く顔を合わせてみたいし、メンターさんにもお会いしたいです。(画面上の印象と違ったらどうしよう…)

選定理由

- * コロナの影響が見事に反映されていると感じました(佐々木徹さん)
- * コロナ禍の中でもたくましく育つ新人への期待を込めて(鈴木利幸さん)
- * 遊び心と哀愁を感じる秀作だと思います(西部君隆さん)

優秀賞

誰もが共感するであろう一句

オンライン
胸から下は
オフライン



特別賞

経理への感謝が溢れる一句

コロナでも
経理まだまだ
紙対応



リサーチソリューション本部
第2ソリューション部
芳田涼さん

作者の声

新卒研修を受講していた際の恰好について川柳にしてみました。上半身は割と綺麗な服を着ているつもりですが、胸より下はジャージやパジャマなどの場合が多く、その状況はコロナ禍ならではのなと思いました。入社日に間違えてジャージを履いていけないように気を付けます…。

選定理由

- * きっと誰もが持っているこのネタ、川柳になるとひときわ笑えますね(高橋亮さん)



財務経理本部 財務部
泉田久美子さん

作者の声

経理作業は、やはりお客様からの請求書が届いたりするため、この状況下でも紙での対応が続いています。会社の費用をきちんと締めるために出社している経理メンバーのことを思い、紙対応と神対応をかけてみました。

選定理由

- * 出社して対応を継続してくれた経理の方々への敬意を表して(鈴木利幸さん)

作者の声

なんといっても、7期は記念すべき20周年というアニバーサリーイヤーです。社員一同で、この記念すべき年を祝って本当に良かったです。



財務経理本部 財務部
泉田久美子さん

マクロミル
はたち迎えて
おめでとう

作者の声

家の中でも、窓から差し込む日の光ですくすくと成長する豆苗と、家から出られず、日にも当たれないリモートワーク中での憂鬱な気持ちを詠みました。こんな暗い世の中でも植物はすくすくと成長して偉いと感じました。



統合データ事業本部
データマネジメント
プラットフォーム部
瀬川順弘さん

豆苗と違い
成長
しない

作者の声

新卒研修はすべてオンラインのため、出社して自分のデスクを見ることがないまま日々を過ごしています。最近、ふと「自分のデスクは会社にあるのだろうか」と思い、五七五で表しました。デスクが存在することを願います…。



リサーチソリューション本部
第2ソリューション部
芳田涼さん

本当に
あるかわからぬ
MYデスク

参加賞

残念ながら入賞には至らなかったものの、編集部の目に留まった秀逸な作品がまだまだたくさんありますのでご紹介します!【新型コロナウイルスにまつわる一句】と【編集部イチオシの一句】です。

作者の声

マクロミルも20周年を迎えましたが、それだけ長い月日が経った今、CafetteMille?までもPayPayに対応出したことに、時代の波を感じました。



財務経理本部 財務部
泉田久美子さん

はたちだと
カフェつてみるも
ペイペイに

作者の声

新型コロナウイルスの影響で、保育園の登園も禁止となり、嫁も私も平日・休日問わず家になるので、リビングに家族全員の顔が揃った状況となりました。



統合データ事業本部
データマネジメントプラットフォーム部
フォームプランニングG
村岡洋輔さん

コロナ禍で
一つの部屋に
顔並ぶ

作者の声

新型コロナウイルスの影響でリモートワークとなり、会議も飲み会もTeamsで対応するようになりました。また、お客様からのニーズもオフライン調査は感染が広がる可能性があるためオンラインへと切り替えがあったと聞いています。そういった状況を川柳にしてみました。



財務経理本部 財務部
泉田久美子さん

仕事・飲み
コロナで転換
オンライン

作者の声

毎日出社せずに業務をしていますが、ニュースでは連日品川港南口を歩き交う人の流れを報道しています。安全に働けていることに安心しながら、よく見知った品川駅が通常と違う様子を不思議さを感じている川柳です。(字余り)



リサーチソリューション本部
第2ソリューション部1RU
1G
杉浦光さん

テレワーク
会社に行かず
日々業務
毎日見かける
品川港南

作者の声

20新卒家制度の家長をやっている、家訓の一つに「信頼される社会人になろう」があったので、それがきちんと伝えられていたらよいと思っています。

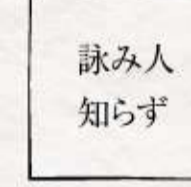


オープンパネル事業部
プロダクトU
OPディレクションG
福川里央さん

社会人
信頼されて
独り立ち

作者の声

小学校3年生になり、生意気になってきた娘が「離れてよ」「来ないで」と言うようになりました。ソーシャルディスタンスを意識した発言だと信じている父親の切ない想いを、川柳にしました。



詠み人
知らず

離れてよ
娘の言葉に
コロナかな?

作者の声

今までリモート勤務は難しいと思っていたRDの業務が、新型コロナウイルスの影響を受け、今ではきちんとできているので、すごい変化だな…と感動&驚きでした!



リサーチアーキテクツ本部
リサーチディレクション部
品川RDU 3G
加藤愛美さん

コロナにて
RDの業務が
BORDERLESS

作者の声

オンライン会議の参加者が咳をしている時、「コロナかな?」と心配してしまう気持ち、新型コロナウイルスに自然と敏感になってしまっている感覚を川柳にしました。「コロナ禍(ころなか)」というワードを使いたかったため、「コロナ禍な」と「か」を漢字表記にしました。

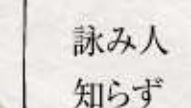


リサーチソリューション本部
第2ソリューション部
芳田涼さん

画面越し
咳するあなた
コロナ禍な

作者の声

CafetteMille?の「うまい棒牛タン塩味」が美味すぎます。入荷いただいた方へ感謝を伝える場面がなかったので川柳で表現しました。ただ申し訳ないのですが、美味すぎるあまり入荷後に即買い占めており、この美味しさを社員の皆さんへお伝えすることができません。すみません。



詠み人
知らず

ありがとう
おいしすぎるよ
牛タン塩味

作者の声

新卒は毎日朝会で同期の顔を見ますが、明らかに月曜日と金曜日とは顔が違って、疲れが顔に出ているんです。(笑)研修も全部リモートなので慣れない中、苦戦しています…。



リサーチ営業本部
第4営業部
松林遼真さん

テレワーク
日々顔やつれる
同期達

作者の声

朝9時に起きても、通勤の移動がないため全く焦らないことから。



リサーチ営業本部
第3営業部 1G
樽石誠也さん

テレワーク
9時に起きても
焦らない

作者の声

新卒研修はすべてオンラインで受講しているため、講師や参加者とは画面越しのお付き合いです。この状況における何とも言い難い不思議な感覚と寂しさを川柳にしました。早く出社して皆様にお会いできることを楽しみにしています。



リサーチソリューション本部
第2ソリューション部
芳田涼さん

研修の
相手はいつも
画面越し

PRESENT

今号のプレゼントは、「あの人のオススメ! 読んで良かった本・漫画」(P18~23) の中でご紹介した14作品をセレクト。さらに「Special Interview」(P24~29) に登場いただいた三浦瑠麗さんの自叙伝も差し上げます。



孤独の意味も、女であることの意味も
三浦瑠麗



恋文の技術
森見登美彦



読書について
アルトゥル・ショーベンハウアー



アオアシ
1~3巻セット
小林有吾



凍りのくじら
辻村深月



働き女子が輝くために28歳までに身につけたいこと
漆紫穂子



サプリ
1~3巻セット
おかざき真里



異邦人
カミュ



水滸伝
1~3巻セット
北方謙三



売れる会社のすごい仕組み
佐藤義典



心を整える
長谷部誠



ストーリーとしての競争戦略
楠木建



宇宙兄弟
1~3巻セット
小山宙哉



キャプテン
1~3巻セット
ちばあきお



キャプテンシリーズ
1~3巻セット
後藤竜二

応募方法

右記のQRコードよりアンケートにご回答ください。
回答された方の中から抽選で15名の方に、1作品ずつプレゼントいたします。
ぜひ、沢山のご応募をお待ちしています!
アンケート回答締切: 2020年7月15日(水)
当選者の発表は、賞品のお渡しをもってかえさせていただきます。



vol.160

Editor in Chief Takako Shimose

Designers Masakazu Tashiro
Ryuku Matsuzaka
Mayumi Matsumoto

Editorial Staffs Masafumi Ohishi
Nozomi Iwahara

Message 特集では「コロナ禍の密な連携」と題し、この3カ月における各部の動向をご紹介しました。新型コロナウイルスの影響による事業へのインパクトは避けたいものがありましたが、一方で、ずっと難しいと考えられてきた全社「リモートワーク化を全社一丸となって一気に推し進められたことは、マクロミルにとって大きな前進でもあったと思います。特にRD部では、社内インフラや総務Uなどの協力を得て、たった10日で全員がリモートワーク環境を構築できたこと。その意思決定のスピード感や各部間の連携力は純粋にすごいと思いましたし、こうした機動力の高さはマクロミルの強みでもあり改めて実感しました。アフターコロナにおいてもさらに良い働き方や環境づくりを模索していきたいですね。また前号より、ミルコミは社外公開化をスタートしました。今後は社員の読み応えを維持しながら、社外の方にマクロミルの良さを知っていただくツールとしても活用していきたいと思っています。ご希望の方には複数冊差し上げますのでお知らせください。今後もより良い誌面づくりをしていきたいと、ぜひアンケートにご協力いただけますと幸いです。

編集部一同



BIOHAZARD RE:3

好評発売中

広告 本ページでは、マクロミルでリサーチをお手伝いしたお客様の商品・サービスの広告を掲載しています。掲載ご希望の方はご連絡ください。(掲載料はいただきません)

株式会社カプコンより2020年4月に発売された『バイオハザード RE:3』のゲームコンセプト開発にはマクロミルとセンタンの提供するニューロリサーチが採用されました